

H A G I 萩

おかげさまで
1996-2016
20周年
20th ANNIVERSARY

SPRING ISSUE 2016

79

題字は吉田松陰筆跡



デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション アール・ヌーヴォーのガラス
会期：平成28年(2016)4月23日[土]～6月19日[日] / 休館日：5月9日[月]、5月23日[月]、5月30日[月]、6月13日[月]

HAGI URAGAMI MUSEUM

エミール・ガレ、ナンシー 《花器(カッコウ、マツヨイグサ)》 1899/1900年頃 ©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto: Studio Fuis-ARTOTHEK

萩とアール・ヌーヴォー

鈴木 潔 / 長浜アートセンター館長

アール・ヌーヴォーを代表する工芸作家エミール・ガレ（1846～1904）は、フランスの地方都市ナンシーを拠点に活躍し見事な結実を残した。だが、ガレ作品のすべてがアール・ヌーヴォー様式だったわけではない。1880年代前半までは歴史主義的な折衷デザインが仕事の大半を占めていた。古典古代、中世、バロック、ロココ、さらにはエジプト、イスラム、中国、日本などの幅広い美術を涉猟し、異文化を強引に組み合わせて意表をつくアレンジの手腕に識者は舌を巻いた。30代のガレは、本歌取りのような原典と写しの間に横たわる微妙な距離感の演出に妙技を発揮するパロディの達人であったのだ。ガレが自身の芸術を深化させ、アール・ヌーヴォーの巨匠、象徴主義の表現者へと転身をはかるのは1880年代中頃である。若き日から取り組んでいたイマジネーションを刺激する連想性を重視する創作は、新規事業の立ち上げという形で新たな局面を迎える。

1885年、ナンシーに家具工場を新設したガレは、^{よせぎそうがん}寄木象嵌技法でマホガニーやローズウッドなどの木片を組み合わせ、家具の天板や鏡板を見事な絵画的装飾で埋め尽くしていった。天井のしみや大理石の縞目が奇妙な顔に見えたり、空に浮かぶ雲が動物の群れに見える場合があるように、^{そくめ}空目の縞模様は川の流れや森の茂みを連想させる暗示力を持つ。偶発的な抽象形態は見ようによっては何にでも見える可能性を秘めているのである。心理学で使うロールシャッハ・テストのインクのしみのような不定形な形に着目したガレは、曖昧な視覚情報をもたらすイメージの喚起作用を操作し、ダブルイメージの世界を構築してゆく。

同じ頃、ガラス工芸でも「悲しみの花瓶」と呼ばれる黒色ガラスの開発があり、多義的な解釈をもたらす造形が展開した。日本画の「たらし込み」技法のように不定形な造形、しみやぼかしを活用する表現は色の濃淡を誘発する描法から生まれる。グラデーションは単色表現で、特に黒を使った階調変化は光の

明暗とも結びついてわかりやすい。東洋の水墨画が好例で、筆のかすれや墨の滲みを岩肌に見立てる類の筆法は周知の通りである。相手が紙ならばしみやぼかしは簡単に作れるが、ガラスで同様の効果を得ようとしたら容易ではない。ガラスは絵具を吸い取ってはくれない。非具象形態の暗示効果に期するところがあったガレは、^き被せガラスのカメオ彫り技法を応用する。色違いのガラス素地を重ねて吹き上げ、冷却後に表層を削り落とし下地の色を見せる伝統的手法である。元来は貝や^{めのうざいく}瑪瑙細工で使われ、モチーフの輪郭を強調し浮き上がるような立体感を演出するためにあった。ところが逆転の発想というか、ガレは^{そうろうたい}朦朧体のカメオ彫りを試し、輪郭の研磨をきっちり仕上げず中途半端に止め、フォルムや色相の変化を緩慢に見せて、絵具のしみやぼかしと同等の効果を手に入れる。

1887年頃から始まった黒色ガラスの連作は、酸化第一鉄、酸化クロム、あるいは、鉄とコバルト、マンガンの混合物などを混入したガラス素地を還元炎にさらして黒く発色させたものである。微妙に色味が異なる黒褐色の薄層を幾重も被せ、段階的に削り落としてゆくと、おぼろげな色調変化を伴う鉛色のグラデーションが浮かび上がる。ほの暗い複雑なテクスチュアを眺める時、私は明治18年（1885）から3年間ナンシーに滞在し、ガレと交友を重ねた^{たかしまほっかい}高島北海（本名は得三 1850～1931）の動静を思わずにはいられない（詳細は以下を参照。井土誠「高島北海・ナンシーにおける活動とその反響」下関市立美術館研究紀要 第2号 平成元年3月）。

萩の藩医の家に生まれ、後年日本画の大家となって文展審査員も務めた高島北海は滞仏中に多くの絵を描いた。下書きもせずいきなり白い紙に筆をおろして、人々が見ている前で即座に仕上げってしまう^{せきが}席画のパフォーマンスは、フランス人を随分と驚愕させたらしい。それらは水墨画、ないしは墨を基本に

淡彩を加えた作品で、ガレも北海画を2点所有していた。日本美術への造詣が深かったガレにとって、実際の作画行為を目のあたりにするのは興味津々であったと思う。ガレは北海から何を吸収したのか。奇想天外な構図法、文人画ならではの詩味、「もののははれ」の心情を学んだと推測する人もいる。しかし、実作を見れば分かる内容ならば日本人に教を乞うまでもない。むしろ作画の工程で発生するアクシデントへの対処、墨が滲む偶然をも統制下に置く筆さばきの観察など、眼前の技法教示によってのみ理解出来る知見に留意すべきではなかろうか。その辺の事情は北海自身の回想からも推察できる。

「…（ナンシーには）日本の絵手本は大変はいって居る。しかし画く人がない所へ日本人の画く人が来たといふので大に賞賛されたです。何でもないのでけれど美術家が尋ねて来て方法を聞く。是で大に交際を得たです」（防長新聞 明治36年9月19日号）

ガレの前に広げられた紙の上でしみ、ぼかされてゆく墨跡の曖昧であるがゆえの雄弁。カラフルな色を使わずとも多彩な表現が可能なモノクロームの世界が刻々と出現してゆく瞬間の共有は、多義図形による象徴的表現を模索していたガレにとって、まさに時宜にかなう示唆となり得たであろう。北海の滞在中に開発された黒色ガラスは、時系列的にも、黒という色彩の選択、ぼかしや滲みを模倣した研磨仕上げの点からも、北海が描いてみせた水墨画との関連を予想させて余りある。後期のガレ作品の魅力である詩的気配の描写、手をつかめる実体を持たない雰囲気表現法の確立に萩出身の日本人が関与していたとすれば、まことに奇特な僥倖だったといえよう。

黒いガラス器の底には署名のみならず、花や昆虫などの凝った装飾を施した例が少なくない。ヘルムート・リケ氏が指摘されたように、底に手間をかける仕事は黒色ガラスが多く生産された1880年代から90年代前半までに集中している（「デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション アール・ヌーヴォーのガラス」展図録 中日新聞社 2015年 72頁）。手に取って拝見出来る人だけが享受する隠された造形の楽しみ。陶器製造も手がけたガレに萩焼の豪快な割高台を吹聴し、茶碗観賞の作法について蘊蓄を垂れた人がいたら…などと私は空想している。



花器(スイレン) エミール・ガレ、ナンシー
制作：ブルグン、シュヴェーラー商会、マイゼンタール 1892/1893年頃
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto: Walter Klein

アール・ヌーヴォーの
ガラス

デュッセルドルフ美術館
ゲルダ・ケプフ・コレクション

2016.4.23(土) - 6.19(日)

休館日 | 5月9日[月]、5月23日[月]
5月30日[月]、6月13日[月]

開館時間 | 9:00～17:00 (入場は 16:30まで)

観覧料 | 一般 1,000(800)円
70歳以上の方・学生 800(600)円
※()内は前売りおよび20名以上の団体料金。
※18歳以下の方、および高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在籍する生徒等は無料

主催 | アール・ヌーヴォーのガラス展萩実行委員会
(山口県立萩美術館・浦上記念館、毎日新聞社、tysテレビ山口)

後援 | ドイツ連邦共和国大使館、ドイツ連邦共和国総領事館、山口県教育委員会、萩市

特別協力 | エフエム山口

照明設計協力 | パナソニック株式会社

普通展示（浮世絵）

明治開化絵

会期：平成28年(2016)4月7日[木]～5月8日[日]

明治新政府の近代化政策のもと、西洋文明の導入が積極的に進められました。洋風建築、鉄道、馬車、博覧会、洋装など、急激に変貌を遂げる社会の様相をいち早く記録した浮世絵版画を開化絵といいます。鮮烈な赤色系の色料が使われたことから赤絵ともよばれました。明治期を代表する浮世絵師たちが描いた開化絵をご紹介します。



昇斎一景 『元ト昌平阪聖堂ニ於テ博覧会図』 明治5年(1872) 大判錦絵3枚続

浮世絵に描かれた動物たち

会期：平成28年(2016)5月10日[火]～6月12日[日]

植物や鳥、虫、小動物などを描いた花鳥画は絵画の伝統的な主題です。浮世絵版画においては天保期にひとつの分野として確立し、歌川広重が優美な作品を描きました。また、『北斎漫画』をはじめ動物を描いた浮世絵版画は、アール・ヌーヴォーの造形に大きな影響を与えました。特別展示〈デュッセルドルフ美術館ゲルダ・ケプフ・コレクションアール・ヌーヴォーのガラス〉とあわせてお楽しみください。

※普通展示と特別展示の観覧料は別料金となっております。



歌川広重 『紫陽花に翡翠』 天保3年(1832)頃 大短冊判錦絵

木版画家 立原位貫

会期：平成28年(2016)6月14日[火]～7月24日[日]

立原位貫氏(1951～2015)は、浮世絵版画の復元、復刻を行う木版画家です。立原氏は複数の職人が関わる浮世絵版画の制作工程を、全て一人で手がける高い技術の持ち主でした。また和紙や絵具、制作に使う道具の復元も試み、研究を重ねました。当館名誉館長の浦上敏朗氏(1926～)は、原画を貸与することで立原氏の活躍を支えてきました。本展では浦上氏旧蔵の原画と立原氏の復刻を並べてご覧いただくほか、立原氏のオリジナル作品も併せてご紹介します。



立原位貫 復刻『歌川国芳筆 似達磨の一軸』 昭和54年(1979) 大判錦絵

普通展示（東洋陶磁・陶芸）

明時代陶磁器の魅力

会期：平成28年(2016)4月7日[木]～8月28日[日]

明時代(1368～1644)には様々なやきものがありますが、とくに白磁をベースに絵付けされた五彩や青花磁器の華やかさは大変魅力的で、この時代の豊かなやきもの文化を象徴しています。また、その人気は中国内のみでなく、周辺国の日本、ヨーロッパやイスラム諸国などの西方へも広がり、多く輸出されました。さらに、日本とのつながりで面白いことは、上質なものばかりでなく、いわゆる「虫喰い」と呼ばれる釉薬の剥離した部分をもつ「古染付」と呼ばれる粗製の青花磁器が多く渡ってきたことです。整った美しさだけではなく、多様な魅力をもつ明時代陶磁器をご紹介します。



五彩龍文壺 明時代・萬曆(1573～1620) 高さ12.2cm

陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界

会期：平成28年(2016)4月7日[木]～平成29年(2017)3月5日[日]

十二代三輪休雪(本名龍作。昭和15年<1940>生まれ)は、エロス(愛)とタナトス(死)という二つの欲動(本能)を主題に据え、その相克に人間の存在根拠を見つめながら制作活動を展開してきた陶芸家です。しかも、器から離れてかたどられることが稀であったやきもの世界で、一貫して彫刻的具象造形で自己を表現してきました。その独創の思想と呼べる陶造形から、今回は、エロスの豊饒を感得いただける作品をご紹介します。タナトスと渾然一体となった「生」のリアル(現実)が見所です。



「寂・若女」(部分) 昭和54年(1979)～平成5年(1993)

特別展示のご案内

特別展示 ISHIGURO MUNEMARO — 最初の人間国宝 — 石黒宗磨のすべて

会期 ● 平成28年(2016)7月2日[土]～8月28日[日]
休館日 ● 7月11日[月]、7月25日[月]、8月8日[月]、8月22日[月]

※書画については、作品保護のため会期中展示替えがあります。

主催：石黒宗磨展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、読売新聞社、KRY山口放送)、美術館連絡協議会
後援：山口県教育委員会、萩市
協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜
協力：日本通運



『白地鉄絵裸婦図録』 昭和23年(1948)～昭和25年(1950) 個人蔵

特別展示

現在形の陶芸 萩大賞展Ⅳ

萩焼400年の歴史を有する山口県の文化資源である「陶芸」領域の一層の振興と質の向上を目的として、活動する陶芸家を対象とした作品の公募展を開催します。

第1次審査作品募集期間

オンライン受付・持参：平成28年(2016)8月1日[月]～8月31日[水]
郵送受付：平成28年(2016)8月1日[月]～8月23日[火]〈期間内消印有効〉

展覧会会期

平成28年(2016)12月3日[土]～平成29年(2017)1月29日[日]

※詳細については、当館ホームページ等でお知らせします。

Special Selection

特選鑑賞室

特選鑑賞室は収蔵する浮世絵版画のなかから名品1点を展示し、じっくりと鑑賞していただくコーナーです。
平成28年度は『名所江戸百景』から以下の12点をご覧ください。

山口県立美術館 / 山口県立萩美術館・浦上記念館

平成28年度 県立美術館

メンバーズクラブ

県立美術館メンバーズクラブでは、山口市/萩市にある2つの県立美術館をよりお楽しみいただける各種サービスをご用意しています。

会員特典

展覧会が3回まで無料!

両館の企画展(特別展示)の中から、
お好きな展覧会を3回まで無料、4回目以降は半額でご覧いただけます。
また、普通展示(コレクション展)も3回まで無料、4回目以降は100円でご覧いただけます。
※対象の企画展は、裏面下段、「平成28年度 企画展(特別展示)スケジュール」をご覧ください。
※普通展示(コレクション展)の特典は、企画展(特別展示)と同時観覧の場合に限ります。

- 展覧会オープニングセレモニーへご招待!(抽選で10名様限定)
両館の企画展(特別展示)オープニングセレモニーに抽選で10名様をご招待します。
- 開催中の展覧会図録を割引販売! 図録価格は各展覧会ごとに異なります。
- 両館の展覧会、イベント情報などをご自宅にお届けします!
- カフェでのお得な特典をご用意しています! 詳しくは各館にてお尋ねください。
- 会員限定のイベントを開催!

- 年会費 一般会員: 2,000円
学生会員(19歳以上の学生の方): 1,700円
シニア会員(70歳以上の方): 1,400円
- 募集期間 平成28年3月18日(金)~平成28年7月31日(日)まで
- 有効期間 ご入会日~平成29年3月31日(金)まで

会員規約・申込用紙は各美術館ホームページからもダウンロードいただけます。

入会した
その日から
使えます!

山口県立美術館 URL <http://www.yma-web.jp/>
〒753-0089 山口市亀山町3-1 TEL083-925-7788 FAX 083-925-7790

山口県立萩美術館・浦上記念館 URL <http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/>
〒758-0074 萩市平安古町586-1 TEL0838-24-2400 FAX 0838-24-2401

お問い合わせ

開館時間
9:00~17:00

<p>2016年 4月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 堀切の花菖蒲 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>堀切の花菖蒲園は文化年間(1804~1818)に伊右衛門という人が花菖蒲の栽培を始めて以来、多くの人が訪れる名所となりました。花菖蒲越しに向こう岸を眺めると、一工夫された構図の作品です。</p>	<p>5月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 駒形堂吾妻橋 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>駒形堂と吾妻橋が左下に描かれています。赤い旗は、駒形堂の筋向いにあった小間物屋百助が宣伝に掲げたもの。空にはホトギスが飛び、吉原の遊女二代目高尾太夫の詠んだ歌「君は今駒形あたりほととぎす」を連想させます。</p>	<p>6月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 亀戸天神境内 大判錦絵 安政3年(1856)</p> <p>亀戸天神境内にある心字池。本来ならば太鼓橋の下にも空が続くはずですが、初摺は池と同じ藍色で摺られています。後にこの配色は改められました。</p>
<p>7月</p>  <p>二代歌川広重 名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい 大判錦絵 安政6年(1859)</p> <p>雨の日のしっとりとした雰囲気漂う作品です。赤坂御門前の坂の辺りは森林や人の影が重なっています。この作品は二代広重を襲名した歌川重宣が描いたもので「二世廣重畫」と署名されています。</p>	<p>8月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 両国花火 大判錦絵 安政3年(1856)</p> <p>江戸の年中行事のなかでもとりわけ人気が高かった両国花火。夜空に打ち上げられた花火のきらめきが巧みに表現されています。隅田川には客を乗せた船が集まり、両国橋の上も見物人で賑わっています。</p>	<p>9月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 猿わか町よるの景 大判錦絵 安政3年(1856)</p> <p>歌舞伎や人形浄瑠璃の芝居小屋、芝居茶屋が立ち並ぶ猿若町の夜の風景。人々は芝居が終わって帰路につく様子です。その姿は月に照らされ、地面に影を落としています。</p>
<p>10月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 よし原日本堤 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>荒川の氾濫を防ぐために築かれた日本堤は、吉原への通い道としても栄えました。夕暮れの頃、上空では雁が月を横切って帰へ帰り、地上では人々が葦簾張りの茶屋が連なる日本堤を通過して吉原へと向かいます。</p>	<p>11月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 浅草田圃西の町詣 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>11月の西の日には驚神社で西の祭(西の市)が行われます。吉原の遊女屋の窓際からネコが見つめる先には、縁起物の大きな熊手を担いで歩く人々が見えます。客からのお土産でしょうか。室内にもこの熊手をモチーフにした簪が置かれています。</p>	<p>12月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 深川洲崎十万坪 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>深川洲崎十万坪は江戸時代に埋め立てられて出来た土地です。冬の雪空に鷺が舞い、鷺と同じく高い視点からこの土地の広く荒涼とした様子が描かれています。遠くに見えるのは筑波山です。</p>
<p>2017年 1月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 日本橋雪晴 大判錦絵 安政3年(1856)</p> <p>雪がやんできれいに晴れ上がった日本橋の様子。手前には魚河岸があり、人々が魚を運んだり競りをしたりと賑やかです。遠景には江戸城、さらにその向こうには富士山が見えます。</p>	<p>2月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 廓中東雲 大判錦絵 安政4年(1857)</p> <p>東の空が明るくなる頃、吉原で唯一の出入口である大門が開き、客は朝帰りをしました。路上はまだ暗く、植込みの桜の花は薄曇りばかりで表現されています。</p>	<p>3月</p>  <p>歌川広重 名所江戸百景 隅田川水神の森真崎 大判錦絵 安政3年(1856)</p> <p>隅田川上流西岸から筑波山を眺めた景色。前景右手にあるのは水神社で、このあたりの森を水神の森と呼びました。満開の桜の花が作品に華やかさを与えています。</p>

2016	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
4	展示替えのための休館						普通展示(浮世絵) 明治開化絵 (4/7~5/8)																								
							普通展示(東洋陶磁) 明時代陶磁器の魅力 (4/7~8/28)																								
							普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (4/7~2017/3/5)																								
							普通展示(陶芸) 茶陶萩 一伝統の革新一 (~5/8)																								
							特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 堀切の花菖蒲 (4/7~4/30)																								
							茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (4/7~2017/3/26)																								
							第39回山口伝統工芸展 (4/7~4/17)												デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション アール・ヌーヴォーのガラス (4/23~6/19)												
5							普通展示(浮世絵) 明治開化絵 (~5/8)												普通展示(浮世絵) 浮世絵に描かれた動物たち (5/10~6/12)												
							普通展示(東洋陶磁) 明時代陶磁器の魅力 (~8/28)																								
							普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (~2017/3/5)																								
							普通展示(陶芸) 茶陶萩 一伝統の革新一 (~5/8)												普通展示(陶芸) 萩焼の細工物 (5/10~10/16)												
							特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 駒形堂吾嬬橋 (5/1~5/31)																								
							茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (~2017/3/26)																								
							デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション アール・ヌーヴォーのガラス (~6/19)																								
6							普通展示(浮世絵) 浮世絵に描かれた動物たち (~6/12)												普通展示(浮世絵) 木版画家 立原位貫 (6/14~7/24)												
							普通展示(東洋陶磁) 明時代陶磁器の魅力 (~8/28)																								
							普通展示(陶芸) 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界 (~2017/3/5)																								
							普通展示(陶芸) 萩焼の細工物 (5/10~10/16)																								
							特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 亀戸天神境内 (6/1~6/30)																								
							茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth (培養体 / 天と地の間) (~2017/3/26)																								
							デュッセルドルフ美術館 ゲルダ・ケプフ・コレクション アール・ヌーヴォーのガラス (~6/19)																								

休館日 ■ ガラリー・トーク ● ガラリー・ツアー ■ 記念講演会 ★ イベント

★イベント

【スペシャル・ガラリー・トーク】(講師による「アール・ヌーヴォーのガラス展」作品解説)

日時●4月23日[土] 11:00~12:00

講師●鈴木 潔氏(長浜アートセンター館長)

【砂糖でパート・ド・ヴェールをつくろう!】(参加無料/事前申込制)

日時●5月5日[木・祝] ①10:00~12:00 ②14:00~16:00

講師●yukaotani(ユカオオタニ)氏(美術作家)

場所●多目的室

定員●各回15名(小学生以上)

【エナメル絵付けを体験しよう!】(事前申込制)

日時●5月7日[土]、6月4日[土] ①10:30~12:00 ②13:30~15:00

講師●池田 香氏(きららガラス未来館技術スタッフ)

場所●多目的室

参加費●1,380円

定員●各回16名(小学生以下の方は保護者同伴)

※イベント詳細は美術館ホームページをご覧ください。

■記念講演会 (聴講無料/当日受付先着順)

日時●4月23日[土] 13:30~15:00

講師●鈴木 潔氏(長浜アートセンター館長)

演題●萩とアール・ヌーヴォー

場所●講座室(座席数84席)

●ガラリー・ツアー (担当学芸員による特別展示作品解説)

「アール・ヌーヴォーのガラス展」会期中の日曜日11:00~12:00

■ガラリー・トーク (担当学芸員による普通展示作品解説)

いずれも11:00~(30分程度)

4月 9日[土] 茶陶萩 一伝統の革新一

4月16日[土] 明治開化絵

5月14日[土] 浮世絵に描かれた動物たち

5月28日[土] 明時代陶磁器の魅力

6月11日[土] 萩焼の細工物

6月25日[土] 木版画家 立原位貫

※スペシャル・ガラリー・トーク、ガラリー・トーク、ガラリー・ツアーは各展示室にて実施します。ご参加には観覧券が必要です。

■交通アクセス

【新山口駅から】

- 直行バス(スーパーはぎ号)(約60分)で萩・明倫センター下車。徒歩約5分。
- 防長バスまたは中国JRF(バス約70~95分)で萩バスセンター下車。徒歩約12分。

【JR山陰本線】

- JR萩駅から萩循環まわーバス(西回り)約30分。
- JR東萩駅から萩循環まわーバス(東回り)約30分。
- JR玉江駅から徒歩約20分。

【山口宇部空港から】萩・石見空港から】

- 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70~80分。(利用前日までに要予約)

【自動車】

- 「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小部萩道路」絵室ICから約20分。
- 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い。

